

知的障害特別支援学校における野球動作が苦手な 子どもに対するアプローチ方法の一考察

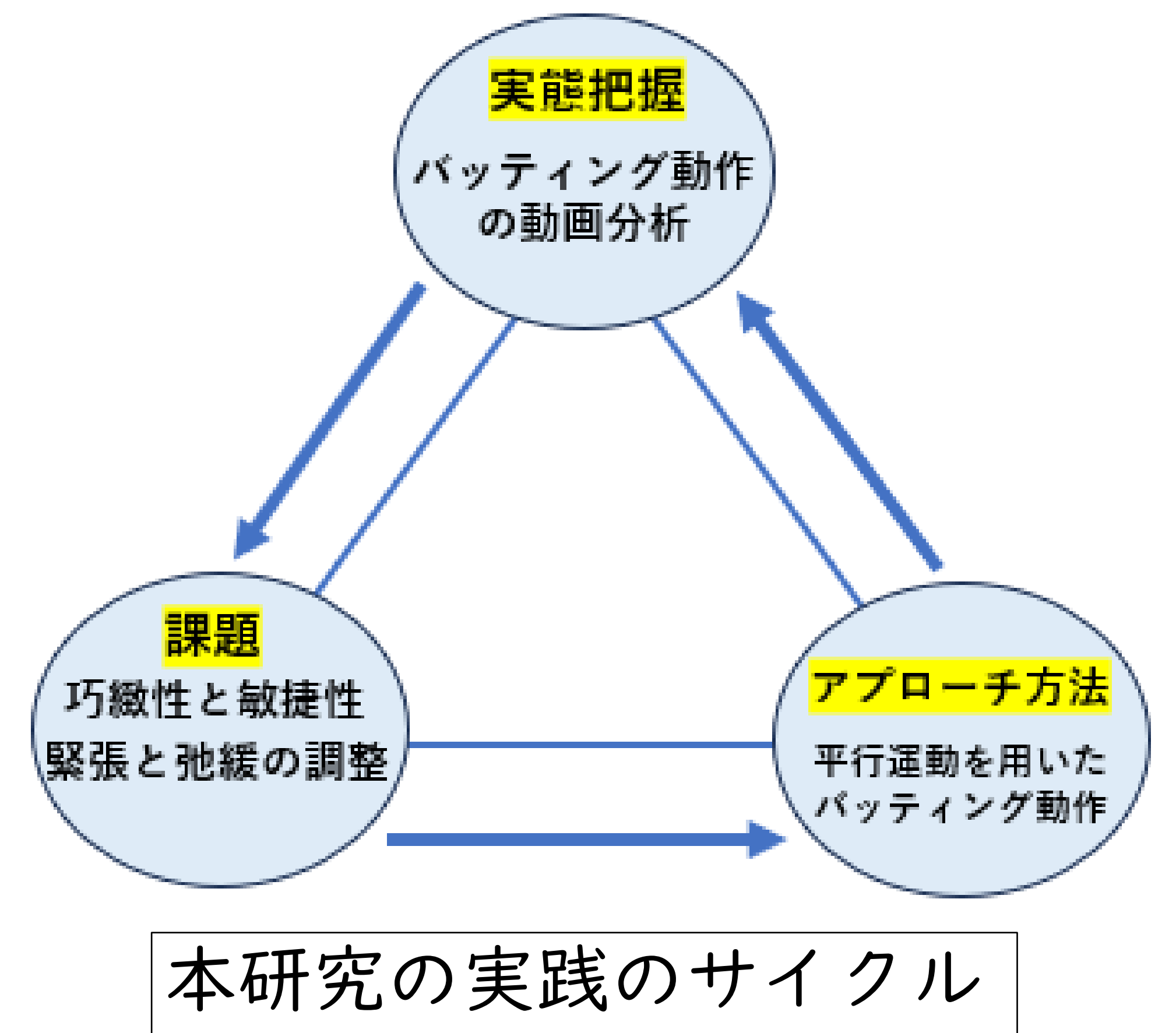
～手足の協調運動の向上を目指した教育実践～

キーワード：知的障害、野球動作、バッティング、手足の協調運動

I. 本実践研究の背景と目的

知的障害特別支援学校に在籍する子どもたちは、運動に対する「不器用さ」や「ぎこちなさ」があることが知られている。このことについては、発達性協調運動障害（Developmental Coordination Disorder; DCD）の様相が明らかに見られる（大原ら, 2022）。「障害者スポーツ推進プロジェクト(障害児・者のスポーツライフに関する調査研究)」(スポーツ庁, 2024)によると、スポーツ非実施者がスポーツを実施しない理由として、「運動・スポーツが嫌いである」が最も割合が高いとされている。

本校高等部の一部の生徒は昼休みに運動場で球技に取り組むことが日課となっており特に野球を好んで取り組む生徒が多く見られるが、ボールがバットに当たらない、キャッチボールがうまくできない等、思うように野球を楽しめない姿が見られることが現状としてある。そこで本研究では、運動に対する野球のバッティング動作に着目し動作改善のためのアプローチ方法を検討する。



II. 研究方法

【実践期間】令和6年9月23日（月）から令和6年11月29日（金）とした。

【研究対象】本校高等部1年〈生徒1名〉とした。

【倫理的配慮】対象者の保護者には研究の趣旨を説明し、同意を得た。

【実践内容】野球のバッティング動作

【分析方法】動画記録からの動画分析



III. 結果

生徒の実態把握から、バットを振る動作(スイング)とボールがバットに当たる瞬間(インパクト)に関して、「巧緻性と敏捷性」「緊張と弛緩の調整」の2つ観点から、平行運動を用いたアプローチ方法を検討した。

動作改善のための平行運動を用いたアプローチ方法

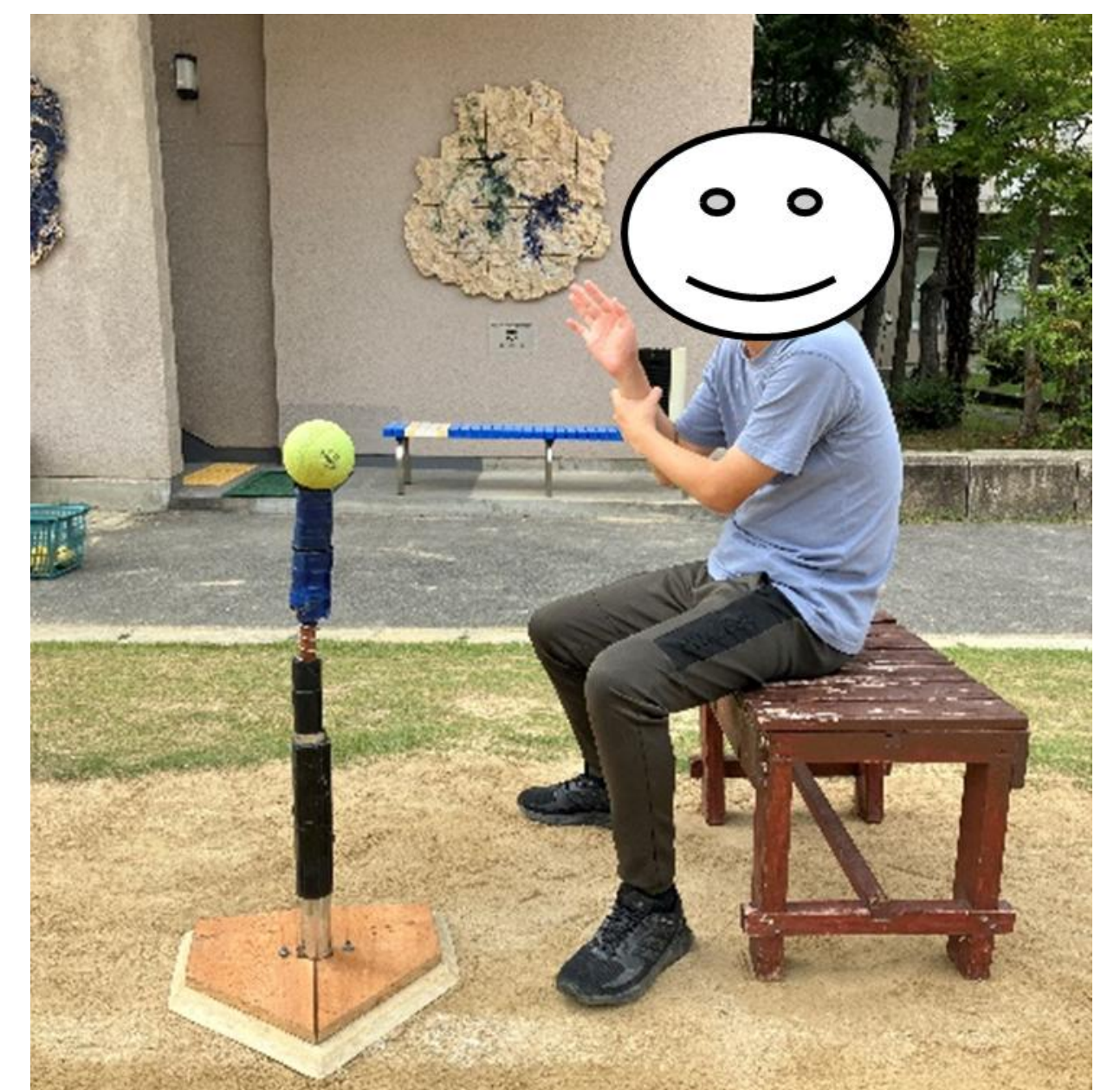
①座位姿勢での素振り動作

下半身を固定し、下半身の筋緊張緩和を目的とした。上半身の動き(腕を振る動き)のみに意識を向けられるようにしたりすると考えられる。



②手打ち動作

ボールに当てる感覚やバットを平行に振る腕の軌道を体感することを目的とした。座位姿勢の状態から左手で右手首を持ち、右手をバット代わりにする。



IV. 考察

本研究では、スポーツや運動を行う際にぎこちなさがある子どもに対し、その実態から2つの観点に着目しアプローチ方法を検討した。「巧緻性と敏捷性」「緊張と弛緩の調整」の2つの観点で運動動作を分化し、生徒が「できる」実感を伴いながら動作改善に向かえるようにした。子ども一人ひとりの特性から考えられるアプローチを実践することで、成功体験を積み重ねることができるようになる。野球のバッティング動作(ボールを打つ)ができるという自信にも繋がり、運動に対するネガティブな感情も薄れるのではないかと推測する。今後の課題として、「巧緻性と敏捷性」「緊張と弛緩の調整」に関するさらなる具体的なアプローチ方法を検討し、次年度の実践に繋げる。これらの観点に対する評価指標は今回設定していないため、その評価は困難であるが、今後、評価指標の開発を含めた検討が必要である。